

## 天沼教会 証「もし神様を知らなかったら」

～私の半生記1～

平成25年(2013年)6月15日(土)

11:35~12:00

天沼教会 鈴木隆子

### ◆自己紹介

本日、証をさせていただきます、鈴木隆子と申します。初めてお会いする方もいらっしゃると思いますので、簡単に自己紹介いたします。仕事は手話通訳士と手話講師、日本語教師をしています。講演会や、成人式、平和記念式典などのイベント、また三鷹にあるルーテル学院大学というキリスト教の大学に聴覚障害の学生が5名ほどいますので、そこで手話通訳をしたり、また2012年12月の衆議院選挙では当時の野田首相のNHKの政見放送の手話通訳をさせていただきました。

### ◆先祖のこと



私は、実は5代目のクリスチャンです。これは(写真参照)私の母方の祖母の祖母、私にとってひいひいおばあさんにあたる人で横井琴子といいます。琴子おばあさんは嘉永元年の生まれですから、黒船でペリーが来た5年前に生まれた人です。この人の旦那さん、つまり私のひいひいおじいさんは横浜で貿易の仕事をしていました。仕事は順調だったようですが大酒飲みだったことに悩み、琴子おばあさんは子供を連れて横浜の教会に通っていました。当時の教会は、外国人の宣教師の方がいらしたので、琴子おばあさんは子供を育てながら英語の勉強をし、教会で英語の通訳をしていたそうです。どんな

に辛いことがあっても、決して人の悪口を言わず、いつも部屋で静かにお祈りをしていたと、祖母がいつも言っていました。私の祖母は小さい時、ずっとこの琴子おばあさんと同じ部屋で暮らしていて琴子おばあさんのことを尊敬していたそうです。

この琴子おばあさんの長男が私のひいおじいさんの横井太郎です。(写真参



照) ひいおじいさんは、幼い頃からこの琴子おばあさんに連れられて教会に通い、利発だったので、外国人の牧師さんからアメリカで勉強することを勧められてアメリカに渡りました。アメリカで大学を卒業して、日本に帰り、太平洋戦争の頃は満州で満蒙百貨店というデパートを経営していました。

戦争が激しくなり、自分が東京から連れてきた社員を無事に東京に帰すのは自分の責任と思い、自分の命と引き換えに社員全員を無事に東京に帰すように交渉しました。最後の一人の社員が無事に東京に帰ったという連絡を受けて、紋付袴に着替えて自宅の

門の前に立ち、ロシアの兵隊の銃弾に倒れて亡くなりました。最近では企業のトップが自分だけ逃げてしまったり、部下に責任を押し付けてしまうことがよくあります。でも、ひいおじいさんはクリスチャンとして、立派な最期だったと思います。



この横井太郎の長女が私の祖母、大好きな私の祖母の依於子です。幼い時から母親に虐待されて、いっぱい辛い思いをしてきました。生きている間中、苦勞が絶えませんでした。でも、おばあさんの琴子から神様のことを教えられて、明るく前向きに生きてきました。おっちょこちょいで、とっても可愛い人でした。勉強が良くできて、四谷雙葉では総代。国語の先生を志して東京女子大学に入学しましたが、父親が事業に失敗して大学を辞めざるを得ませんでした。幼い時私に「たこちゃんは本当に可哀想だけれど、神様は必ず見ていてくださるからね。神様は守ってくださるからね」と神様を教えてくれた人です。

寝たきりになった時に、どうしても今までの恩返しがしたくて、私の家に引き取り、亡くなるまで2年間介護をしました。2004年6月14日に亡くなり、天沼教会でお葬式をしていただきました。



そして、依於子の娘が2012年4月に亡くなった、私の母、大好きな私の母の博子です。2012年4月28日の安息日の朝、私が天沼教会で手話通訳をするために出かける前、急いで洗濯と夕食の支度を済ませて「それじゃ教会に行ってくるね」と母の部屋を開けると、倒れていて、心肺停止でした。突然神様のみもとに行ってしまいました。飯野海運に勤めていた時は、「ミス飯野」と言われていたそうです。でも結婚してからは、辛い思いをしてうつ病になりました。母と私は战友のように、助け合い支え合いながら生きてきました。

これらのひいひいおばあさん、ひいおじいさん、祖母、母そして私、と5代続いたクリスチャンです。こういふと、私がクリスチャンになったのは自然の流れだと思いになるかもしれませんが、そうではありません。私は、クリスチャンになる時に本当に悩みました。なぜかというとなら私にはどうしても許せない人がいるから。それは私の父だからです。

先程、控え室で待っていたら、今日は天沼教会全体が父の日モードで、「お父さんに感謝！」と言っているのを聞いて、今日こんなお話をしているものかと悩みましたが、用意してきたとおりにお話をします。

#### ◆父のこと

父は新聞記者でした。初めは政治部に入り、その後ベトナム戦争の時は特派員としてベトナムで取材をしていました。でも、お酒を飲んでキレルと手がつけられなくなり、母や私にも暴力をふるいました。いわゆるDV、ドメスティック・

バイオレンスです。機嫌がいい時は、ホテルオークラや帝国ホテルに食事に連れて行ってくれました。でも、何かのきっかけでスイッチが入ってしまうと、もう手がつけられなくなります。私は物心ついた頃から、いつも私が寝ている枕元で父と母が争っていたのをよく覚えています。私の両親は、父が母に13年間片思いをしていて、そして結婚しました。母にしたら、自分のことを13年間も片思いしていた人から暴力を受けるなんて夢にも思わなかったことでしょう。いざ離婚となったときに、経済力がないと私の親権が取れないので、母は私が幼稚園に入る前から英文タイプの講師として青山学院大学や立教女学院などで

働き始めました。

私はいつも祖母の依り子とお留守番をしていました。祖母は私を不憫に思ったのでしょう、いつも私に「たこちゃんは今可哀想だけれど、必ず神様は見えてくださるからね。必ず守っていてくださるからね」と言ってくれました。また、『『艱難辛苦、汝を玉にす（かんなんしんく、なんじをたまにす）』よ。』と言ってくれました。幼い私は意味がわからず、何かのおまじないか呪文かと思ってしまいました。意味がわかったのは、大人になってからです。祖母の言葉があったから、今日まで私は生きてこられました。もし祖母が神様のことを教えてくれなかったら、私はグレていました。そして、当時の私の家庭を知る人なら、私がグレても仕方ないと思ったはずです。

#### ◆荒れた家庭

私の家庭は荒れていきました。小学校6年の時には、私の親友のお母さんが、「あんな家庭の中にたこちゃんを置いておくのは可哀想」と言って、夏休み中、浜田山にある親友の家で過ごしました。また中2・中3の頃は、更に状況が悪くな

って、ほぼ毎週のように日曜日になると父がお酒を飲んで暴れて、警察を呼んでいました。私が警察を呼ぶと、「またお宅ですか」と言われるのが恥ずかしくてたまりませんでした。その頃から母はうつ病になりました。「たくさんあった縁談の中からどうしてこういう人を選んでしまったのか」と自分を責めて苦しんでいました。私が中3のときにうつ病を発症して以来、2012年の4月に亡くなるまで、母は抗うつ剤と精神安定剤が手放せませんでした。いつも明るい母からは想像できないと思いますが、抗うつ剤と精神安定剤が切れるととたんに精神状態が不安定になり、ご飯が食べられなくなり胃液を吐いて苦しむのです。そんな状態だったので、私は母に「我慢しないで離婚していいよ」と言っていたのですが、当時は今と違って、離婚がまだそんなに一般的ではなかったので「もし離婚して片親になったことで、娘が就職の時や結婚の時に不利になっては可哀想だから」と言って、私が結婚するまでは我慢すると決めて、頑張っていました。蝶よ、花よと育てられた、お嬢さん育ちの母は我慢することが苦手だったのですが、よく頑張って我慢してきたと思います。

父が暴れて怖い思いをした事はたくさんありますが、一番怖かったのは私が20歳の大学2年生の時です。酔っ払って夜中の2時に帰宅した父が、鍵を忘れて家に入れず大声で「開けろ」とドアを叩きました。ご近所にご迷惑なので、母が慌てて鍵を開けたのですが、まだチェーンがかかっていた状況で父がドア

を引っ張ったのでドアがあかず、逆上した父が庭に回って、金属製の雨戸を外して、ガラス戸を叩き割って部屋に入ってきたのです。庭に出るためのガラス戸で、高さは180cm位あり、とても大きいガラスなのですが、それを雨戸で叩き割って入ってきました。本当に本当に怖かったです。そのとき母はガラスでザックリと手を切って怪我をしました。部屋中にガラスが飛び散り、悲惨な状態になりました。今思い出しても、本当に怖いのです。それから完全に家庭内別居になりました。

#### ◆私の結婚

その後年月がすぎて、私が結婚することになりました。やっと母が父と別れられる時が来ました。ところが父はどうしても離婚に応じません。あんなに暴力を振るうなら、父も嫌なのだろうから、離婚に応じればいいのに、どうしても離婚してくれません。私はその時、息子を身ごもっていました。私は母を置いて結婚する気はなくて、母と一緒に暮らすことが条件でした。ですからもし、両親が離婚しないまま、こんな悲惨な環境の中で子供を産んだら、その子がまた私と同じ思いをしてしまうことになる。こんな辛い思いは私までで終わらせなければと思い、毎日父と話し合いをしました。どうしても応じてくれないので、私は父の兄や姉に相談しました。叔父は「今までも自分の弟が隆子ちゃんやお母さんに暴力をふるっていたのは、うすうすわかっていたのだが、自分が何か言うと『言いつけたな』ということになって、もっとひどいことになるといけないと思って黙っていた。でも今度は言っているんだね」と言われました。私は、叔父と叔母に土下座をして、父が母との離婚を承諾するように説得を頼みました。本当に最悪の胎教だったと思います。普通なら、初めての出産となれば、いい音楽を聴かせて、穏やかに暮らせるようにと家族が配慮するのですが、本当に最悪の胎教でした。叔父や叔母に助けてもらって、何とか両親の離婚が決まったように思えたのですが、やはりすんなりとはいきませんでした。

離婚の1週間前に父がお寿司を食べたいと言ってお寿司屋さんを頼みました。小さい時から知っているお寿司屋さんなので、玄関で立ち話をしていました。すると酔った父が突然出てきて、お寿司屋さんに向かって「貴様、なにしにきやがった。バカヤロー、早く帰れ！」と怒鳴りつけました。私はビクビクしてお寿司屋さんに「早く逃げてください」と言い、父に「お寿司屋さんに何を言うの？」というと、「お前は父親と寿司屋とどっちが大事なんだ」と言って、私に暴力をふるいました。母がすぐに飛んできて、「この子のお腹には赤ちゃんがいるんです！赤ちゃんに何かあったらどうするつもりですか！」と間に入って

私を守ってくれました。すると父は「お前のお腹の子供なんて死んだってなんだって構わない！」と言って、今度は母に向かって暴力をふるいました。私の力では、母を守りきれないので、警察を呼び、三鷹警察の警察官が4人飛んできてくれました。

本当に怖くて、そして本当に悲しかったです。実は子供を身ごもる前の年に、体調が悪くて衛生病院の婦人科へ行ったら、「将来不妊治療をしないと、子供は産めない」と言われました。それなのに授かった大切な大切な赤ちゃんです。あのとき、母が守ってくれなかったら、私は息子を流産していたと思います。身体を張って私と息子を守ってくれた母には本当に感謝しています。その後、無事に離婚が成立して、私は結婚し、これでやっと幸せになれると思いました。

ところが息子が1歳半になった時、何故か母のうつ病が重くなってしまいました。やっと念願かなって離婚できたのに、「なぜ？」と思って色々調べたら、「荷下ろしうつ病」というのがあるとわかりました。例えば、子供が結婚してホッとしてうつ病になるとか、定年退職してホッとしたと同時にうつ病になるということがあるそうです。毎日「自分なんか生きていてもしょうがない。死にたい」と言って苦しむ母と、ものすごく元気いっぱい活発な1歳半の息子を抱えて、どうやって心のバランスをとってよいかわからず悩んでいた時に、「神様に頼りたい。クリスチャンになりたい」と思いました。

私の母は東京衛生病院にかかっていたのですが、うつ病が重くなり通院できない時期がありました。いつも私が母の代わりに病院に通っていました。その時、ある看護師さんが私をそっと空いている病室に連れて行き「あなたとお母さんのために祈らせてください」とおっしゃって祈ってくださいました。私は本当に嬉しくてたまりませんでした。家族以外の方が、一生懸命に母と私のために祈ってくださるなんて、初めての経験でした。そして「キリストへの道」の本を勧めてくださいました。その時に目にとまったところが、次の言葉です。「イエスは私どもが罪に汚れた、よるべのないままで、みもとに行くのを喜びになります。私どもは、弱さ、愚かさ、罪深さなどを皆持ったまま、悔いの涙をもって主の足元にひざまずいて良いのです」（「キリストへの道」P68）。

実の父を許せず、こんな私はクリスチャンになってはいけないと思っていたのですが、汚れた心のままでも神様は受け入れてくださると知り、クリスチャンになる決意をしました。そして1998年12月5日にバプテスマを授けていただきました。

#### ◆PTSD 発症

バプテスマを受けたときに、私は辛かった過去は全部封印しよう決めました。離婚して一人暮らしをしている父が寂しくないように、息子の小学校の運動会に父を呼んだりしていました。ところが、ちょうど3年前の2010年7月に父との間でトラブルが発生しました。父のマンションに呼ばれて行ったとき、父はまたキレて手がつけられなくなってしまいました。以前、お酒を飲んで母に暴力をふるったときと、全く変わらない父の姿を見て、私は怖くてマンションから逃げて帰りました。

その日以来、私の心は壊れてしまいました。手話通訳をしていて、自分の家庭のような話が出てきたり、テレビドラマを見ていて自分と同じように父親がお酒を飲んで母親に暴力を振るうようなシーンが出てくると、とたんに自分の辛かった場面が鮮明に蘇り、フラッシュバックを起こします。息が苦しくて、心臓がバクバクして、声を上げて泣いてしまうのです。それが40分~50分続いてしまいます。一番辛い思い出が映画館の大画面に再現されるような感覚で、ものすごく辛いです。視覚・聴覚のみならず、自分が殴られて床に転がった時の、床の冷たい感覚までが蘇ります。心療内科にいったところ、PTSD（心的外傷後ストレス障害）との診断が下りました。今でも1ヶ月に1、2回はフラッシュバックの発作に苦しみます。お医者様には「PTSDにつける薬はないのよ」と言われました。

どうやら、私はPTSDと一生付き合っていかなければならないようです。

#### ◆主人のアスペルガー症候群

さらに追い打ちをかけるように、母の葬儀の直後に、主人が発達障害の中の一つのアスペルガー症候群であることがわかりました。これは知的障害のない自閉症で、人とのコミュニケーションが苦手で、その場にふさわしい行動ができなかったり、相手の気持ちを理解することができません。私が母の死やフラッシュバックで悲しんでいる時に、感情を無視したような行動をとってしまいます。さらに、主人は息子の大学入試センター試験の真っ最中に、突然「会社を辞めたい」と言いました。昇進して部下が増えることが決まり、まとめる力がないから辞めたいとのこと。大学受験の一番大事な時期なのに、父や夫という立場よりも、自分のやりたいことを優先してしまうのがアスペルガーだそうです。お医者様からは「家族がいるのだから、次の仕事を見つけてから会社を辞めるように」と言われていたのですが、次の仕事を探す前に、3月に会社を辞め、3ヶ月経った現在も無職です。息子とふたりで、これからどうなるんだろうとドキドキしている状態です。（その後、退職して4ヶ月経って、ようやく次の仕事を探しました。でも、不安定な職業なので、将来どうなるかわかりません。）

このように私の家庭には、次から次へと問題が起こり、今も問題の真っ只中にいます。これからどうなるのか、見当もつきません。ずっと支え合ってた母は亡くなってしまおうし、酒乱の父には当然頼れません、主人はアスペルガーで相談にのってもらえず、頼れる親戚もいません。息子は親身になって考えてくれて、本当に感謝ですが、息子には息子の人生があるので、重荷になっては可哀想です。友人に話すと「たこちゃんはこんな大変なのに、よく笑っていられるね」と言われます。それは、きっと神様を知っているからだと思います。幼い日に、祖母が、いつも私に「たこちゃんは可哀想だけれど、必ず神様は見ていてくださるからね。必ず守っていてくださるからね」と言ってくれました。その言葉があったから、今日まで私は生きてこられました。神様が絶対に守り、導いてくださることを確信して、どんな時でも下を向かず、まっすぐ前を向いて生きていきたいと思っています。



神様と、支えてくれる優佑に心から感謝しています。  
本当に本当にありがとう。

鈴木隆子

(2013年7月13日(土) 加筆修正)